

ほろほわかやま



巻頭
特集

和歌山の本を読もう

～ ものがたりの舞台を巡る旅 ～

ものづくりat和歌山
わかやま魅力発信人

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

商売繁盛願う縁起物のし餡

岡本良太さん ～和歌山の老舗 次世代へつなげる～

「ウィズコロナ」時代を生き抜き、和歌山県を再生する

和歌山の本を 読もう

—ものがたりの舞台を巡る旅—

レジャーや観光もままならない日々が続くなか、

読書をする機会が増えた方も多いのではないだろうか。

気軽に出掛けられないなら、本の世界へ。

和歌山にゆかりのある文学に触れて、物語のなかで県内各地を巡ってみよう。



安珍清姫伝説はさまざまな作品のモチーフになった



江戸時代、和歌の浦の観海閣から紀三井寺方面を望む—「紀伊国名所図会」

作家を魅了する風土

—ことができるだろう。

温暖な気候と美しい自然に

恵まれた和歌山は、古くから

多くの旅人が訪れ、時には歴

史の舞台となってきた。文学

の世界でも作品として描かれ

ることが多く、著名な作家の

作品は数知れない。

地域ごとに文化・歴史・気

候それぞれに特徴のある和歌

山。文学を通じて各地の風土

を知るとともに、それぞれに

郷愁を感じられるのではない

だろうか。よく知る場所や身

近な建物、町並みなどが登場

するかもしれない。目に浮か

ぶ風景や登場人物の方言な

ど、作家の心をとらえた和歌

山の魅力にあらためて触れる

記紀・万葉との縁

和歌山は古代には「木々が

豊かで木の神様が棲む国」を意

味する「木の国」と呼ばれ、後

に「紀伊国」となった。現存す

る日本最古の歴史書とされる

『古事記』や、同じく奈良時代

に編纂された『日本書紀』にも

登場する。新元号「令和」で注

目された『万葉集』の約450

0首のうち、107首は紀伊国

が舞台だ。都から紀伊国を訪れ

た万葉人は、各地での見聞や感

動を歌で表現した。

鎌倉時代の『平家物語』で

は、平家の栄華は熊野権現の

おかげと語られている。『道



本屋さんの おすすめの本



『ヒト夜の永い夢』
柴田勝家 著・早川書房

主人公は和歌山が生んだ知の巨人、南方熊楠。昭和初期の田辺粘菌の研究をしていた熊楠は、実在するオカルト研究者たちと共に、粘菌の性質を利用した人工知能の発明に成功。意思を持つ少女型の自動人形を完成させる。

しかし、「天皇機関」と名付けられた自動人形は、熊楠たちの想

本屋フラグ (和歌山市万町4番地)

像を越えた暴走をはじめ、やがて彼らを紀南から、226事件前後の帝都東京へと導いていく。史実と虚構、夢と現実が万華鏡のように交錯する歴史改変SF!



戦前には多くの文豪が和歌山を訪れた。当時の旅館—和歌山市



歌碑を前に、万葉歌について学ぶ人々—海南市

成寺縁起』で知られる安珍・清姫伝説は、能や歌舞伎、浄瑠璃など様々な題材にされてきた。江戸時代後期の『雨月物語』のなかの一篇「蛇性の姪」でもこの伝説が題材にされている。同じく江戸時代には、俳人の松尾芭蕉も訪れた。

ものがたりは絶えない

近代文学では、夏目漱石の『行人』で主人公が和歌山に家族旅行へ出かけた様子などが生き生きと描かれている。

和歌山県出身の作家で有名なのは新宮市出身の佐藤春夫と中上健次。戦後生まれの作家

として最初の芥川賞作家となった中上は、故郷の新宮を中心とする紀州の路地を舞台に、濃密で複雑な人間関係の物語を展開した。

また和歌山市出身の有吉佐和子は、代表作『紀ノ川』でそれぞれの時代をたくましく生きた3世代の女性を描き、テレビや映画など映像化もされ話題となった。

歴史小説や推理小説からファンタジーなど、様々なジャンルの作品で県内各地が舞台となっている。

書店や図書館などでは、和歌山に関連する書籍をまとめたコーナーを設けているところもある。巣ごもり生活のお供として、地元ゆかりのある本を手に取り、新たな発見や楽しみ方を見つけてみてはいかがだろうか。

次のページでは、県内各地を舞台とした文学作品の一部を抜粋して掲載する。

ものがたりの舞台

和歌山北部



① 滝口入道

高山

樗牛 ちまぎやう

壽永三年三月の末、夕暮近き頃、紀州高野山を上り行く二人の旅人ありけり。浮世を忍ぶ旅路なればにや、一人は深編笠に面を隠して、顔容知るに由なけれども、其の装束は世の常ならず…

② 紀ノ川

有吉佐和子

「そつでございますのし」
豊乃は静かに合掌して目を閉じた。花も做って手を合わせたが、廟の前の柱にぶら下っている数々の乳房形に気がつくとしばらく瞑目することを忘れていた。それは羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞りあげたもので…

③ 華岡青洲の妻

有吉佐和子

温暖の紀州は殊に平野から紀ノ川沿いに北上する一帯の村邑を穏やかに豊かなものとしていたから、徳川治政の平和な時代に、草深い名手荘では、村人たちの間で長く話題になるような事件は滅多に起らなかった。

④ 17歳のうた

坂井希久子

このあたりは紀ノ川沿いの平野部だけでなく、自転車でちよつと北上すれば大阪府との境目の和泉山脈にぶつかる。熊の目撃情報は今のところないとはいえ、サメの心配をするよりはよっぽど現実的だ。

⑤ 前科持ち

津本 陽

現場に到着したときは、午前一時を過



紀ノ川沿いの
嫁入りは、
流れに
逆ろうては
ならんのやえ。
『紀ノ川』
御前^{おまえ}本当に
直と一人^まで
和歌山へ
行く気かい。
『行人』



② 慈尊院の乳型



① 高野山



④ 紀ノ川沿いの平野



③ 旧名手宿



⑥ 和歌山城と濠



⑤ JR和歌山駅付近



⑧ 加太の海



⑦ 下津の港

ぎていた。近鉄デパートは、国鉄和歌山駅前ターミナルの北側にある。大通りを挟んで南側に向いあう農協会館との間をつなぐ、約八十メートルの横断歩道のなかほどに、男は倒れていた。

⑥ 行人 こうじん

夏目 漱石

自分たちは何だか市の外廓らしい淋しい土塀つづぎの狭い町を曲って、二、三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠を見た。濠の中には蓮が一面に青い葉を浮べていた。その青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ち付かない自分たちの眼をちらちらさせた。

「へえーこれが昔のお城かね」と母は感心していた。

⑦ 籠の鸚鵡 かご おうむ

辻原 登

下津は、紀伊國屋文左衛門が紀州ミカンを積んで江戸に向けて出帆した港として知られる。町の主要産業はかつてミカンと漁業だった。紀伊國屋文左衛門の船出からおよそ二七十年後の一九五〇年代のはじめ、丸善石油が紀伊水道に面した天然の良港に目を付けて、ここに大規模な石油精基地を建設した。

⑧ Dの複合

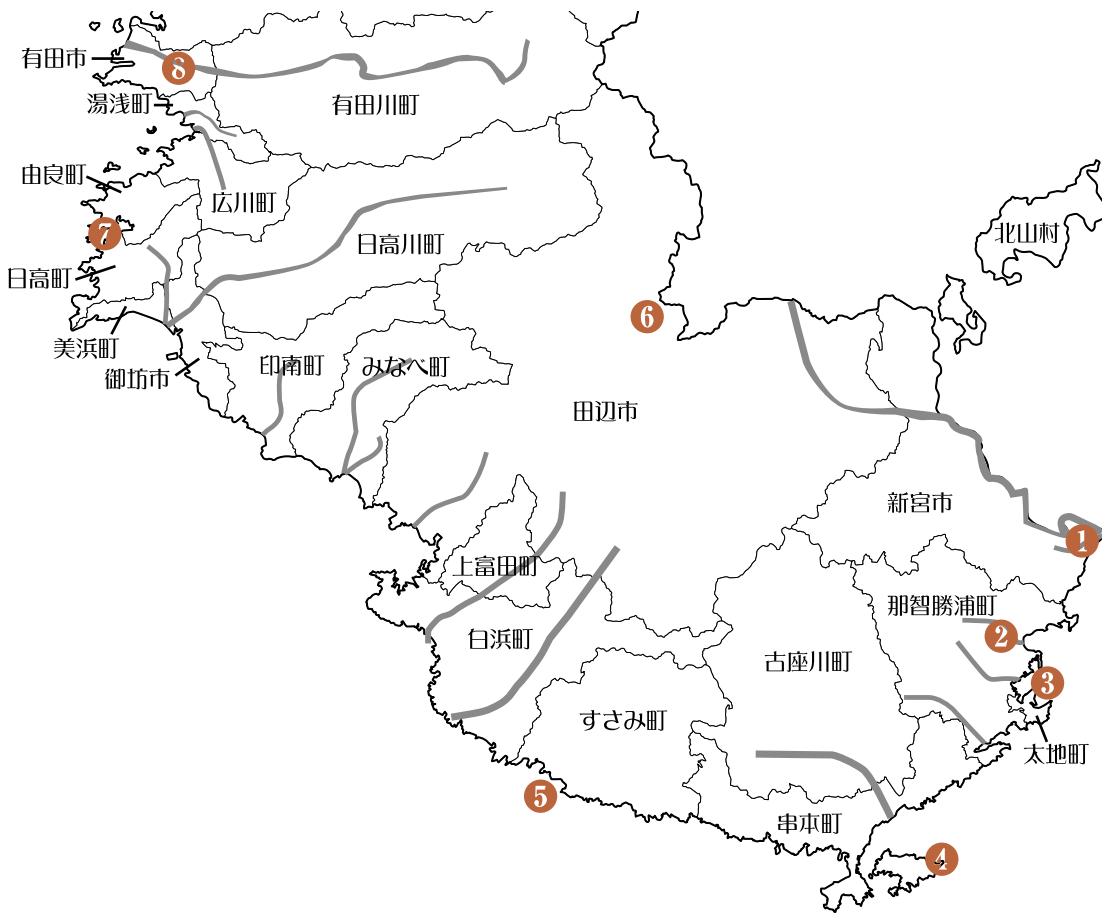
松本 清張

網野神社から紀州の加太へ回ってもらいたい。ここは、これまでも日本古代史の上ではたびたび注目された土地である。また、ご承知のとおり、この近くには淡島神社がある。



ものがたりの舞台

和歌山南部



① 望郷五月歌

…あさもよし木の国の

牟婁の海山

夏みかんだわわに実り

橋の花さくなべに…

佐藤 春夫

② 三熊野詣

三島由紀夫

それは紀伊勝浦の温泉旅館の一室で、もちろん先生とは別室であり、常子の部屋は小体な一人部屋であるが、すぐ床下まで来ている海の、ひそかに岸を舐める水音がする。暗闇の中でそれをきいていると、舌なめずりする小さい獣どもが、ひしめき合って床下柱を這い上ってくるような気がする。

③ 深重の海

津本 陽

眺める眼にころよいまでに透明度を増し、ぎやまんのようにならびやかな光沢を帯びた海水のなかに、さしわたし五、六寸の純白の水くらげが、何十万か、何百万か、数も知れず太地湾いちめんにひらがり、浅深さまざまに浮漂する。

④ ブルーアウト

鈴木 光司

樫野に生まれてずっとこの地で暮らしてきた勇吉にとって、荒れた海など日常の一部に過ぎない。毎年、九月ともなれば、決まって台風が通り過ぎて、風浪を轟かす。

⑤ 枯木灘

中上 健次

枯木灘は、貧乏なところだった。海が眼の前にあっても海岸が崖つぶちになり、

空青し山青し海青し

日はかがやかに

南国の

五月晴れこそ

ゆたかなれ

『望郷五月歌』

親爺梶とれ

灯明が見える、

あれは筆島

めどの口

『深重の海』



② 那智勝浦の町並み



① 海を望む新宮市街



④ 樫野埼灯台



③ 太地町 クジラの供養碑



⑥ 紀伊山地の小川



⑤ 枯木灘



⑧ 有田のみかん畑



⑦ 由良の港

舟をつける港はなかった。平地はなく、すぐ山になっていった。海べりの山に生えた木のごとくは、間断なく吹きつける潮風の為、葉は落ち幹も梢も曲り、さながら枯木のように見える。山をひらいて作った物も育たなかった。

⑥ 大誘拐 天藤 真

往還沿いに熊野川の支流が流れている。一むかしまえは筏流しに使われた水量の豊かな流れである。その対岸はネコのひたいほどの畑を挟んで、すぐに鬱蒼とした杉林に覆われた八百メートル級の山々だ。

⑦ 走れ乗合馬車 神坂 次郎

弥太次のもとに、花嫁御寮がやってくるのは翌、安政二年の春であった。

派手やかな嫁入りであった。嫁入りの三日前、輿入れ道具十五荷を積んだ船が由良の湊につき、荷運び三十人の行列がのどかな長持唄とともに門前村の由良家にむかった。

⑧ 有田川 有吉佐和子

その一人娘の千代に、津久野家へ生涯仕えている男衆が、どうして冗談でなくてこんなことが云えるだろう。茂太んの手は、また絶え間もなく動いて密柑の木の新芽の中に伸び、黄金色の実を曳き出し、鉢で二個ずつ一組に揃えて切取っては籠に入れた。有田川沿いの邑々では、その季節になれば子供でも物心づくすとすぐに始める密柑採りである。



縁起物のし飴

商売繁盛願う

和歌山のえびす祭には欠かせない縁起物「のし飴」。かつては30軒を超える飴屋が製造していたが、今では1軒となった。伝統を守る飴屋にその思いをたずねた。



毎年一月十日前後の三日間、関西地方を中心とした戎神社で開かれる十日戎（えべっさん）。参拝客が商売繁盛を願い買い求める福笹と縁起物の吉兆、それらとともに

えべっさんの定番

売られているのが福飴だ。通常は金太郎飴のようにおたくをあしらった飴だが、和歌山ではひらがなの「のし」の形をしたのし飴が一般的となっている（二〇二一年の十日戎はコロナ禍の影響により、露店販売はほぼ中止）。



代表の海野佳広さん

製造工程



130℃ほどで煮詰めて水分を飛ばす。



冷却版の上に広げて加工しやすい温度まで冷やす



機械で空気を入れながらこねることで真っ白な餡になる



食紅で色をつけた餡を付け、光沢を出すため透明の餡で包む



大きな餡のかたまりをちょうどいい太さになるまで延ばしていく



「のし」の形に成形した餡を板に張りつけ、飾り付ける



えびす祭での販売の様子（水門吹上神社にて）

移りゆく時代とともに

明治時代に考案されたのし餡のルーツは諸説あるが、水引の鬚斗しほから来ているという説や、紀州言葉で語尾につける「のし」が由来とされるなどの説がある。

昭和30年頃までは30軒を超える餡屋がのし餡作りに携わっていたが、時代の流れとともに年々減少現在は和歌山市本町に店を構えるうみの製菓1軒が明治以来の伝統を守っている。

福を届ける

素朴な味わい

うみの製菓代表の海野佳広さんによると、餡屋に丁稚奉公として働いていた祖父が独立・開業したのが始まり。のし餡の製造方法はその頃から何も変わっていないが、原料



えびす祭（東の宮恵比寿神社）

の水餡と砂糖は精製の精度が上がり不純物をほとんど含まなくなっているため、昔と比べて口当たりがよくなっているという。

のし餡の製造は11月中旬から十日戎の当日にかけて行われる。フルーツ味などのフレーバーを展開していた時期もあったが、現在はノーマル・チョコレート・サイダーの3種類を販売。

「和歌山のえべっさんを象徴する『のし餡』として十年二十年と続けていきたい」と海野さん。厳しい時代となっても、前を向いて歩んでいる。



うみの製菓株式会社

〒640-8033
和歌山市本町4丁目7番地
TEL:073-423-0596



総本家駿河屋

岡本良太さん

和歌山の老舗 次世代へつなげる

今回は京都府出身で、総本家駿河屋の代表取締役を務める岡本良太さんに老舗の経営者としての視点から和歌山の魅力を語ってもらった。

意外な和歌山行き

和歌山の駿河屋を継ぐことは、想像したことがなかった。創業560年を迎える老舗和菓子屋「総本家駿河屋」。代表取締役の岡本良太さんは、6年前に京都から和歌山に移り住み、単身赴任している。

総本家駿河屋のはじまりは、1461年、京都伏見で初代の岡本善右衛門が饅頭屋「鶴屋」を開いたことによる。その後、徳川頼宣公のお抱えとなり駿河へ、紀州徳川家が興ると紀州へ。以来、紀州藩主に献上する菓子は駿河屋の菓子だった。

想像以上の

「駿河屋愛」

伝統ある老舗の後継ぎとして生まれ、一度は別



会社に就職したが、誰に言われるでもなく、駿河屋へ戻り働くように。そんななかでの倒産はショックな出来事だった。先祖代々引き継がれてきた大切な場所がなくなってしまうと。

和歌山に呼ばれたのは、2014年。ありがたいことに、親会社の支援はもとより、仕入れ先やお客さんから励ましの声をいただいた。時には、お客さんのほうが駿河屋に詳しく、驚くこともあった。

再オープンの日、不安がなかったと言ったら嘘になる。一度閉めた店にいったいどれだけの人がきてくれるのだろう。しかし、当日、本店の前には長い長い行列ができた。用意した本ノ字饅頭4000個は1時間ほどで売り切れ、行列は途絶えなかった。「待ってたよ」「がんばって」。和歌山の人の「駿河屋愛」は想像を超えていた。

「食べていきなあよー」

実は若い頃、和歌山に住んだことがある。大学卒業後、OA機器の会社で24歳から3年間、和歌山へ赴任した。営業先では「うちでご飯食べていきなあよー」と気さくに誘ってくれることもしばしば。京都の人はどちらかと言えば控えめで自分



岡本 良太

1974年生まれ、京都市伏見区出身。総本家駿河屋の代表取締役社長。生家である総本家駿河屋伏見本舗で勤務。倒産後、再建のために2014年和歌山に赴任する。

を出さないが、和歌山の人はオープンで優しく話しやすい。海も山もスケールが大きく、ゆったりしている雰囲気で、方も好きだった。

今、あらためて和歌山に住むようになって、お気に入りにはやはり海が見える景色。有田方面に車を走らせれば、目の前に海が広がっていく。気持ち晴れる瞬間だ。

次の100年の
土台をつくる

職業体験の中学生が、駿河屋の菓子を食べたことがないと話していた。和歌山での「総本家駿河屋」のブランドは手堅いが、世代間のギャップは気になるところ。子どもや若年層にも浸透する新しい菓子の開発に頭をひねる。伝統的な菓子も、

最初はみんな新商品だったはずだ。「煉羊羹や本ノ字饅頭など、何百年も続く看板商品を生み出した先達は偉大だとあらためて感じます」。路線を逸脱しすぎず、新しいチャレンジを続ける。

得意先、仕入れ先、お客さん…、温かさに支えられた6年間だった。職人も戻り、孤独は感じていない。応援のおかげで

店舗もなんとか安定してきた。駿河屋とともにある人生、これからも期待を裏切るわけにはいかない。

「伝統を守りつつ、この先、和歌山で100年、200年続いていく土台をつくる。次世代につなげるのが自分の使命だと思っています」。決意を胸に、今日も現場をかける。



江戸時代の文献『紀伊国名所図会』に「本ノ字饅頭」の記述がある

郵便はがき

6 4 0 - 8 7 9 0

和歌山市梶取17-2

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
& プレゼント」係

料金を取人払郵便

和歌山中央局
承認

6391

差出有効期限
2022年12月
14日まで



ふりがな			
お名前			
年齢	歳	ご職業	
ご住所	〒		
電話番号			
クイズの答え	1	・ 2	・ 3
本誌の入手場所	※あてはまるものを1つ選びください。		

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

「ウィズコロナ」時代を生き抜き、和歌山県を再生する

和歌山県知事 仁坂 吉伸

世界中に新型コロナウイルス感染症の猛威が吹き荒れ、和歌山県も大変な影響を受けました。こんなに世界中に拡がってしまった今となつては、もはやコロナとうまく折り合いをつけて生きていくしかないと思つていきます。

コロナとの戦いでは引き続き、県の保健

医療行政が早期発見、早期隔離、徹底した行動履歴の調査による感染拡大の防止に努めますので、県民の皆様には、安全な生活、安全な外出、安全な営業に気を付けつつ、なるべく普通どおりの生活や経済活動をしていただくしかないと思います。

さらに、その上で和歌山県が発展していくために必要なことは、まずは、成長への新しい芽を生み出すことです。ロケット発射場建設を契機とした新産業の創出、IR誘致、ICT企業の誘致などの取組を推進することが、コロナが収まった時、和歌山県の成長エンジンとして働いてくれることでしょう。

また、コロナで世界がどう変わるかも見えてきました。コロナでやむを得ず採用したテレワークが意外と生産性を落とさずに済んでいるということから、何も東京の中心地に会社員を集めなくてもいいではないかという新しい動きも出てまいりました。それは、東京一極集中から地方回帰の流れの源となります。とすれば、コストも安く、便利な一方、緑も豊かな和歌山へ企業に移ってきてもらおうとか、狭い都心のマンションのテレワークから、時には和歌山でのワーケーションによって、創造力をかきたててもらおうプロジェクトとか、これもコロナでいや応なく始めたオンラインによる諸事業を、この際チャンスと捉えて、最上のシステムを実現するとか、官民ともにデジタル和歌山を実現することなどを進めていきます。コロナの災厄がかえって起死回生のチャンスになるかもしれないのです。

県民の皆様も和歌山県に元気を取り戻すために一緒に頑張りましょう。



編集後記

私は大学時代を石川県の金沢市で過ごしました。初めて町を歩いた時に目についたのは、ちょっとした川沿いの遊歩道や、お寺の門前、坂道の登り口などに設置された文学碑。そこでは、その場所が登場する小説の一説が、作品の解説とともに紹介されていました。当時はそれほど読書をするほうではありませんでしたが、目の前の景色を表現した作品の文字を追いかけると、それぞれがものすごく面白そうに見えるのを覚えています。

今回の特集は「和歌山の本を読もう」。万葉の時代から都人のあこがれの地だった和歌山は、古くから多くの文学作品の舞台となってきました。近代以降の小説では、私たちがこれまで目にしたことがあるような場所もたくさん描かれています。これらの紹介を通じて、私が金沢で感じたようなちょっとした興奮を、読者のみなさんにも感じていただきたい。そう思ったのが今回の特集のきっかけです。コロナの影響で、いろいろと難しい状況が続きますが、読書の旅を通じて、和歌山の魅力を再発見してもらえれば幸いです。

編集長 宇治田 健志



印刷物を中心に広報活動をお手伝いする会社です。「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じて、文字による地域文化の振興を目指しています。就職応援BOOK「COURSE(コース)」や、キャリア教育本「さくらノート」も発行しています。[沿革] 創業 1972年。設立 1981年。

「ほうぼわかやま」発行について 2020年8月発行予定号はコロナ禍の影響で休刊とさせて頂きました。和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

設置場所：和歌山市内の郵便局、コミュニティーセンター、TSUTAYA WAYなど 詳しくはホームページをご覧ください。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp>

協力機関 本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。(順不同・敬称略)

和歌山県、本屋プラグ、総本家駿河屋、海野製菓

クイズとアンケートで 当たる!!

『図書カード1,000円分』を 4名様にプレゼント!!

ヒント 本号のどこかに 答えが載っています

問題 和歌山を舞台に3代の女性の姿を描いた有吉佐和子の代表作は?

- ①淀川 ②紀ノ川 ③ナイル川

応募方法 Vol.24の答えは①和歌山市でした

このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函(切手は不要です)もしくは右記QRコードを読み取り、アンケートフォームからご応募ください。*応募はお一人様一枚限りをお願いします。



※切 2021年3月末日

本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。